

〈特集:台湾の高等教育における卒業制作・研究〉

日本の大学の英文学科における卒業論文の位置

荒木正純

要旨

日本の英文科の歴史は、イギリスとほぼおなじ 100 年をこえる。明治期、イギリスにできはじめた「国文科」を採用した。その受容の過程で、「卒業論文」も当然のこととして受容した。しかし、戦後、社会体制がアメリカ化したことによって、大学教育も大衆化し、「英文科」への期待が変化した。「文字」から「映像」への時代となったこととあいまって、活字離れが文学離れ現象を生んだ。その中で、「卒業論文」は、必修科目から選択科目へとなり、形骸化した姿ではそぼそと日本の英文学科に棲息している。だが、機能は皆無なのだろうか。

【キーワード:「卒業論文」「英語」「英語英文学」「伝統」「メディア」】

1. はじめに

近年、日本の大学で、英語英文学を前面に打ち出して学生を募集することは困難になっていっている。それは、学生の「英語」離れではない。「英語」にたいする関心が薄れたわけでもない。「英米文学」や「英語学」という大学での研究・教育のほぼ 100 年の歴史がありながら、いや、100 年経過したからか、それにたいする関心が薄れたのである。

そもそも、日本が「英語」に関心を抱いたのは、黒船来航が契機であった。西洋的知をつたえていたオランダ語から、英語がその役割を引き継いだのである。その際の主要な関心は、「実学」であった。研究社出版『英学 100 年:明治編』にこうある。

幕末の英学と同様に、明治維新後の英学も、実学中心であり、実益をもとめたものであり、医学・法律・経済学・天文学・建築学・数学などが中心であった。イギリスの文学を本当に文学として紹介し鑑賞し始めたのは、やはり坪内逍遙や「文学界」の同人たちをまたなくてはならなかった。

また、こうもいう。

明治二〇年前後あたりまでは研究といえるものはなく、そのほとんどすべてが翻訳か部分訳の紹介であり、それも作家の名前がでるとか、その文章の一部を雑誌に紹介する程度であった。英文学の研究は坪内逍遙が東大の文学部政治経済科を出て、できたばかりの早大の前身東京専門学校でシェイクスピアに本格的にうち込み、『小説神髓』(明治十八年、十九年)を著したころから、と考えられるだろう。

実学志向の日本が、どうして英文学を学ぶようになっていったのか。そして、英語の教育をめざす英文科で文学が研究・教育されるようになったのか。つまり、英文学が当初は、「実学」として意識された可能性があるのではないか。

その手がかりとして、中村正直訳『西国立志編』(明治4年)をとりあげたい。周知のように、これはサミュエル・スマイルズ『自助』(Self-Help)の翻訳である。その内容は、いわずとした「300人以上の欧米人の成功談を集めたもの」である。ここに、シェイクスピア、リットン、ディズレイリ、ワーズワス、カーライル、スコットなどの文学者がでてくるのである。つまり、実学と文学がここではリンクされていたのである。

2. 英語英文科の成立史：エリートのための学問教育

そもそも、明治の教育整備のなかで成立した「英文科」もしくは「英語英文学科」は、19世紀後半のイギリスの大学制度を輸入したものであった。それは、イギリスでは、いわゆる「国文科」であった。たとえば、ケンブリッジ大学に英文科が成立するのは、1917年頃だといわれる。そして、それはビクトリア朝の帝国主義を背景として、「国家」意識の育成を担う初等教育にたざさ

わる教師を養成することが大きな目的であった。教師そのものは、いわゆる師範学校で育成したが、その教師を育成する教師を育成することが目的であった。何を、どのようにという教育内容や教授法が研究された。だから、こうした逸話がある。夏目漱石が、ロンドン大学に留学して小説研究をやろうとしていたが、いってみると、そのような授業はなかったという。小説を研究対象とするカリキュラムが存在しなかったのだ。当時、小説は誰でもわかるものだから、「学問」とは認識されていなかった。「学問」として認定されていたのは、詩・演劇・エッセイなどで、とりわけ昔の時代のもものが選ばれていた。なぜなら、読んでもすぐにはわからないからだ。「わからない」からこそ、「研究」が必要だという発想であった。

明治期の大学生は、漱石のようにいわゆる知的エリートであったので、目的意識が今日とはことなっていた。英文学、あるいはアメリカ文学、あるいは英語をかいしてのイタリア文学、フランス文学、ロシア文学、ドイツ文学を学んだ。そもそも、英文科に入るのは、そうした「文学を学び、自分でも作家となろう」としていた者たちであった。あまり、就職のことなどは考えなかった。たとえば、芥川龍之介は、東京帝国大学英文科にはいるが、それ以前から作品をいくつか書いている。卒業すると、英語の教師をやりながら作品を書いていた。

こうした時代に、「学士」となるために「卒業論文」が課されていたのである。たとえば、芥川龍之介は「ウィリアム・モリス」論を書いた。

多くの国民は、せいぜい中学校(現在の高等学校)だけで社会にでた。高等教育における「英語」学習と並行して、国民の間では「英語」学習意欲があり、定期刊行物の雑誌がいくつもでていた。その代表的なものが、その後も形をかえながら存続した『英語青年』(研究社出版)であった。その他、日本の中等教育で使用された、アメリカの出版社がだしたチャールズ・W. サンダースの『ユニオン・リーダー』、マーシアス・ウィルソンの『リーダー』、チャールズ・ジョウゼフ・バーンズの『ニュー・ナショナル・リーダー』などの教科書の、自学自習のための解説をした本もでていた。こうした教科書には、文学も教材として使用されていたが、誰も教材として不適切だなどとは思わなかった。当然のことであった。それは、イギリスの国語教育は、すぐれた「英文学」によっておこなうという思想に裏打ちされていたからである。

もともと、西欧の伝統的高等教育では、日本の漢文のように、ラテン語の学習が必須とされた。中世からルネサンス期にかけて、ラテン語が西欧世界の共通語(リンガ・フランカ)であったからである。だが、この教育は、貴族や上流市民層向けの教育であった。それに対して、18世

紀の後半以降、産業革命で大量の労働者が出現したイギリス、ついでアメリカでは、中流以下の階層から多くの青年をリクルートし、自国語で読み書きができて労働者に指示も下せる下級管理職の養成が急務となった。そのため、新しい効率的なカリキュラムがもたらされ、シェイクスピアなどの英語の古典の理解を到達点とする中等教育カリキュラムが成立した。その中心となったのが、英語学習書のリーダー(読本)であった。日本では、とりわけバーンズのものが宗教色と自由の礼賛が少なく、適度に文学趣味もあるため多く使用されたという。

3. 大衆化した大学の研究・教育：学者・教師養成から一般企業人養成へ

第二次世界大戦後、世界の中心が大英帝国から合衆国にうつり、日本の大学教育は、欧米式からアメリカ式にシフトした。とりわけ、英語教育は、「キングズ・イングリッシュ」もしくは「クイーンズ・イングリッシュ」から「米語」にかわった。そのことは、中等学校の教科書をみればわかる。さらに、英文学研究・教育も、アメリカで活発化した「ニュー・クリティシズム」(新批評)の影響を受け、作品論中心の綿密な読みが推奨された。そのこととあいまって、アメリカ文学が学生たちの関心をひいた。また、「英語学」でも、研究者はフルブライト奨学金をえて、アメリカにいき、そこで構造言語学をはじめとした理論的な流れを受容し、日本にもちこんだ。文献学的な研究から理論的な研究へとの変化がみられた。とりわけ、音声が重視された。その後、隆盛を誇ったチョムスキー言語学の到来があった。

こうした制度や内容の変化と同時に、日本の大学のアメリカ化とは、高等教育の大衆化でもあった。戦後、雨後のタケノコのように、新制大学が設置されて、英文科もふえていった。その中で、学生たちが英文科に期待したのは、アメリカ口語英語の習得であって、英米文学や言語学ではなかった。それにもかかわらず、大学では、学問の府として「学問」が追究されて、学生の期待に応える教育がなされることはなかった。学生は、小説家や学者、あるいは英語の教師になるわけではなく、一般企業に就職することを希望していた。こうした状況下でも、「卒業論文」は、従来の制度的課題としてもっとも重要なものであった。なにしろ、「学問」教育の一応の集大成であるからだ。

4. 主要メディアの変化：活字から映像へ、そして活字離れ

戦後、文化は映像の時代になり、若者の活字離れが危惧されはじめた。活字離れは、当然、伝統的な学問離れとなってきた。大学への進学者はふえつつけるが、伝統的な学問ではなく、新しいメディアを使用する学問に人気が集中するのは当然の流れであった。新しいし、周囲に氾濫するようになったからだ。それでも、大学は、伝統的な装いの研究・教育を維持しつづけてきたが、この15年ほどで、様相は一変した。まず、「英語英文」という名称を使用しない学科が増加し、「国際」「文化」「コミュニケーション」などがそれにかわった。こうした状況で、卒業論文は「選択」にする大学がふえてきている。伝統的な有名大学では、卒業論文を必修にする場合が多いが、そうではない大学では「選択」にする傾向が強い。さらに、数十年前なら、卒業論文は英語で書いていた大学でも、日本語で書かせている場合も出てきて、概要を英語でまとめさせるという妥協策をとっている場合が多い。

このようにして、卒業論文は、伝統的な学問体系の名残として存在するだけになった。伝統的な学問が大学で教育されていなければ、課す必要もなくなっているのであろう。ただ、書くことの効果がまったくなく、無意味になったということではない。受動的な学習傾向の強い今日の大学教育の中で、能動的に学生個人が知的活動をおこなうひとつの場を提供している可能性はある。

5. 白百合女子大学の事例：

ここで、東京にあり短大の時期から数えればほぼ80年の歴史のある白百合女子大学の事例を紹介する。基本的に、卒業論文製作は、「選択」にしてある。卒業論文に係わる単位(12単位)は、他の専門科目を履修して補うことができる。ちなみに、学生数は、1学年120～110名ほどである。

2007 年度

米文学 8名

米文化 6名

英文学 11名

英文化 2名

言語学 16名(英語 3名)

計43名

2008 年度

英文化・文学 10名

米文化・文学 8名

英語学 10名(英語 5名)

計 28 名

2009 年度

英文化・文学 6名

米文化・文学 7名

英語学 5名

計 18 名

2010 年度

英文化・文学 8名

米文化・文学 10名

言語学 11名(英語 5名)

計 29 名

この4年間にかんしていえば、減少傾向にある。内容にかんしては、たとえば、文学についていえば、古典的な作品、たとえば、シェイクスピア、チャーサー、ロマン派詩人、ディケンズ、キャロルなどの研究が主であった2007年からすると、2009年度には、「ハリー・ポッターにおけるファンタジーの仕掛け」のような児童文学、もしくはファンタジー文学という現代的な作品がとりあげられるようになっている。この傾向は、2011年度、2012年度についてもいえる。アメリカ文化にかんしていえば、映画論が2007年度には2件みられたが、2009年度1件、2010年度1件で、それほど多いとはいえない。

卒業論文の内容は、担当教員の授業や学問的内容と平行であるといえよう。多くが、授業でやったことを取り上げる傾向にある。したがって、教員が学生の卒業論文製作を奨励して、意識的に授業を、論文を書くようにリードするような形式で構築することが必要であると思われる。また、数年の間で、文学作品を映画にしたものをみて、それから文学作品を読むという傾向もあるので、映画の利用も大いに関係するであろう。たとえば、ジェイン・オースティンやシェイクスピア、さらにディケンズなどはその傾向が強い。

この減少傾向は、日本の経済状況と関係があり、また就職活動と連動している。3年生の後半から就職活動は開始するので、その感触と卒業論文を選択することが関係しているように思える。3年のはじめに履修登録をするにあたり、就職活動を優先する場合、卒業論文の単位分、約3科目を多く履修することになる。

6. おわりに

卒業論文は、ただ単に、結果が指導教員のもとにくるわけではない。そこにいたるまでの、4月から12月末頃までの、学生との対話の成果となってでてくるのである。また、学生は、先行研究などの議論をふまえることによって、歴史との対話となる。ただ単に、学生個人の意見や感想を綴るわけではなく、学生個人の他者との交流の成果であることに注目すべきであろう。

(あらき・まさずみ 筑波大学名誉教授・白百合女子大学教授)